

# 住民全員を会員とみなした 自治活動(ジチカツ)

京都府長岡京市 八条が丘自治会 会長 八木 仁美



## ■ 八条が丘自治会とは

長岡京市は、京都市の南に隣接した人口8万2000人の自治体で、京都と大阪の交通の要衝として栄えている。

八条が丘自治会は、18棟の団地(95%)と戸建て(5%)で構成されている。480軒、909人が居住している。神奈川県庁から依頼を受けて、神奈川県内の自治体職員や地域活動団体の方が集まり、これからの自治会のあり方を考えるミーティングを実施したときの資料をもとに紹介したい。八条が丘の人口構成率は、65歳以上が36・1%であり、神奈川県(25・9%)や長岡京市(26・6%)と比較すると、高齢者が多い地域だといえる。

私が会長に就任したのは平成30年で、令和になってコロナ禍になった。コロナ禍以前の自治会加入率は62%だったが、令和4年に56%まで減った。今、アフターコロナの経験中である。

会長就任後に役員と考えながら、オンラインで地域行事などの催しを開催したところ、皆さん閉塞感が大きかったようで、お子さんたち、それから若い世代の人は意外にも多く参加があった。役員会の開催もままた

らないので、スマートな自治会を目指して、回覧と併用してブログの開設もした。ニュース紙の各種発行や、メール配信など変革を続けたが、加入率は低下し続けていった。

コロナ禍では、参加型の催しが中止になったことで、会費を半額にして、1000円で徴収した。そのような時に、ある方からお金とともに手紙が届いた。「自治会の『協力金』を同封します。年齢的なこともあり、入会、参加は難しいので宜しくお願ひします」という内容だった。この方は、本来は会員であるべき方ではないだろうか。どうして会員というカテゴリーには入らないのか、自治会の存在意義を非常に深く考えさせられた出来事だった。

会員が減る悪循環は、以下に述べるようなものであると考える。

第1に、課題の解決を会員で行う。第2に、解決すれば非会員も同じ恩恵を受ける。第3に、会員が非会員との差を要求する。第4に、差を作るため会員の負担が増加する。第5に、活動が重荷になる。また、行政からの依頼や、回覧板とお知らせがどっさり来るなど、業務も多い。第6に、この悪循環に気付いた人から脱会する。第7に、残った会員で第一のふりだしに戻る。

このような悪循環に陥っているのではな

いだろうか。これは、本来の地域活動、「ジチカツ」（＝自治活動）ではないと感じた。

### ■住民全員を会員とみなした自治活動

本来の「ジチカツ」は、地域の課題をそこに住む全ての人々がお互いに協力し合って解決する活動ではないだろうか。自治会が他の公益法人やNPO法人と大きく違うところは、地域を代表しているということだ。階段の上り下りが難しい独居老人、特別支援学校に通う子どもなど、地域で見かける

人の中には様々な人がいるが、自治会館の階段に上れる人しか会員の催しに参加できないというのはどうなのだろうか。自治会の非会員も含めて、地域でサポートするのが本来の存在意義ではないのかと役員と話し合った。地域の方全員を会員とみなせば、サポートが必要な方も会員になることができる。私も年齢を重ねた時に、家族だけでなく地域の方から声をかけてもらうと嬉しいだろうと思う。身近に相談したり話したりできる人がいると安心であるし、防犯にも繋がる。それと同じように、先ほどの手紙の主のことが自分ごととして捉えられるようになっていった。

話し合いの結果、会員制を廃止し会費を「協力金」に変更することにした。返礼品を用意し、口座への振込み方式や持参デーを設けるようにした。これは役員の負担を減らす一助になる。集金に一軒一軒回るわけではなく、完全に任意になるため、収入は激減するだろうと予想していた。住民の1割に当たる概ね50軒あればいいと考えた。年間2000円なので、50軒あれば10万円になる。自治会が地域代表として地域の意見をまとめるのに、そんなに難しいことをする必要はない。それほどお金も必要はないと考え、もし1軒も集まらなかった場合

には解散を覚悟した上で、改革に取り組む決意をした。

ここから先は、時系列で起こった変化をご紹介します。

改正後の最初の持参デーは、協力金持参をお願いするチラシを配った。当日、持参された方の声として、出かける用事ができて嬉しい、お金を払うことで社会に貢献できる、会話もできて達成感が味わえた。来年もやってねなどという言葉を聞くことができた。

毎年、70歳以上の地域住民に敬老のお祝いで友愛訪問を行っているが、そのアンケートの中に、「自治会員だけという囲いを外し、全会員としたことは良かったと思っています」という嬉しい言葉があった。私にとって小さな光が見えたような気がした。

### ■会員制の廃止で起こった変化

協力金負担者数はほぼ例年通りであり、過半数の世帯から応援をいただいた。中でも驚いたのは、会員制と謳っていた時に、何度役員が訪問しても会員にならないと頑なだった方たちが、協力金という名目に変えただけで、49世帯が自ら持つてこられたことだ。会員制廃止のこの取り組みは、令和6年1月1日に、京都新聞で掲載された。

### ジチカツ協力金（自治活動への協力金）のお願い

★従来の会員制を廃止し、地域の方、全員に向けた活動をしています。  
★協力金は任意です。（詳しくは、全戸配布資料又はブログをご覧ください。）

協力金⇒2,000円以上

対象⇒地域内の方＋地域外も歓迎

（法人や団体、元・前八条の方など）

返礼品⇒長岡京市指定ごみ袋

#### 協力の方法

①持参⇒6月16日（日）朝8時～17時

管理事務所に、自治会の担当者が待機  
上記以外は、管理事務所の勤務時間内でお預かり

②投函⇒全戸配布資料をご覧ください。

③振込

京都銀行長岡支店 普通 4431049 ㏦ジ ョカ カツ ㏦イ

りそな銀行長岡天神支店 普通 0074575 ㏦ジ ョカ カツ ㏦イ



（自治会協力金）  
二千円也



「活動は自治会員のためだけではなく、地域全ての人のため。規約を変更し、従来の会員制をやめた自治会が長岡京市にある」と紹介された。また、この取り組みは「リビング京都」でも紹介され、一緒に掲載された宇治市のサウスヒルズ町内会と連絡を取り合うなど、新たなつながりが生まれた。

自治会の役員は公募制にした。役員に誰でもなれるようにすれば、手を挙げてくださる人はきつという、会則を見直すことにした。会費を集めるストレスがないことを前面に押し出し、役員を公募した。結果として、役員は18人から22人に増加した。役員が兼務していたスポーツ部は、専門の委員を設けた。

ところが、令和6年5月に開いた総会で、出席者から「勝手に自治会員にされていた。その法的根拠は」との質問を受けた。合意形成を図り、丁寧な説明を続けてきたつもりだったが、この質問にはショックを受けた。私は会長として、皆さんにご紹介しているような内容を、同じようにスライドで紹介させていただいた。その方は、説明を聞くと、会員にさせられたというのは誤解であり、会員制をなくし、住民全員を会員とみなした活動をするということなのかと、非常に深く感銘を受けてくださった。その

際に、広報についてさらに努力しなければ、なかなか周知というところまでいかないと、課題を感じた。

昨年は会費から協力金に変わった年だったので、前年に会員だった世帯で今年度協力を頂いていない世帯に訪問し、協力依頼していたが、2年目に当たる今年度は完全に訪問しないことにした。

現時点では219世帯、世帯率は46%で、過半数割れをしてしまったが、予算の計上は35%ぐらいだと想定していたため、プラスに考えることにしている。

協力金の世帯数は減少したが、イベントへの参加や、友愛訪問された世帯数、役員や階段掲示、スポーツ部の委員など体を使った貢献など、協力金を負担はしていないけれど何らかの形で「ジチカツ」に関わった人たちを含めると、手元の集計で280世帯、加入率は58%になる。

2年目も地域内の70歳以上の高齢者への友愛訪問を実施した。新たに、役員とは別に敬老行事協力員を配置した。これも公募制で、何人かの方から手が上がった。完全ボランティアだが、返礼品として市指定のゴミ袋を差し上げている。皆さん、来年もしますよと言ってくださっている。

今年度は驚くことがもうひとつあった。

それは、このような八条が丘自治会の取り組みを調べて転入し、役員にもなった子育て世代の住民ができたことです。

### ■助け合いとつながりのまちづくり

お金を払って会員になることだけが地域に関わることではない。草むしりや階段掲示のお手伝いや、「八条が丘自治会はこんなことをしている。こっちの地域に住みなよ」というような言葉の宣伝も、地域の協力者だと思っている。実際にそのような人が増加しているのを実感し驚いている。

八条が丘地域内にふれまち八条が丘というチームがあり、イベントを非常にたくさんやってくれているので助かっている。小学生、中学生の子ども委員さんが何名もいる。その子ども委員たちから、「ありがたうを伝える会」で賞状をもらった。私が自治会長をさせていたことがなければ、この子どもたちと出会うこともなく、子どもたちと緊密に話したり成長を見守ることも、もしかしたらできなかったかもしれない。試行錯誤の最中ではあるが、皆様からたくさんヒントをいただきながら、さらに「ジチカツ」や、助け合いとつながりのまちづくりを前に進めていこうと思っている。